

「羅府新報」と日系人

豊田 沖人

1903 年以来ロサンゼルスで出版されている「羅府新報」は、邦字新聞としては全米最大の部数を発行している。地元に着した報道を行ってきた日系新聞の一世紀を振り返る。

キーワード：新聞，日系人，ロサンゼルス，一世，情報

1 はじめに

外国の日本人コミュニティで発行されている，日本語を使用した新聞を邦字新聞あるいは日系新聞と呼ぶ [1]。

最も多く邦字新聞が発行されているとされるアメリカでは現在少なくとも 20 種類が発行されているが (注 1)，そのなかでもロサンゼルスで発行されている「羅府新報」 (注 2) は，全米最大の発行部数を誇る邦字新聞である [2]。最近の多メディア競争の中でその存続を危ぶむ声もあるが，他の新聞が雑誌や小ぶりのタブロイド版なのに対して今でもいわゆる新聞の体裁を保って日曜を除き毎朝宅配されている。地域の日系人にとっては貴重な情報源となってきた「羅府新報」はどのような新聞なのか，そして日系人史の中でどのような役割を果たしたのか，時代を追って見ていきたい。

2 初期の「羅府新報」

アメリカで最初に刊行された邦人紙は，1886 年 7 月にサンフランシスコで刊行された「東雲」(しのめ)，とされているが，「羅府新報」はそれから約 20 年後の 1903 年 4 月に創刊された。日本人の定住が遅れたロサンゼルスの日本人人口も，1902 年にはようやく 500 人に達し，めし屋や医師も含む日本人社会が形成されつつあった [3]。そこに目をつけたサンフランシスコの「新世界新聞」ならびに「日米新聞」が相次いでロサンゼルス支社を設け，それぞれ 200 部をサンフランシスコから鉄道便で送り始めた。翌年，地元北メイン街に誕生した「羅府新報」は，当初メミオグラフ刷り，週 2 回，発行部数 250 と貧弱なものであったが，サンフランシスコから届く 2 紙が 2 日遅れであったこともあって部数を維持した。まもなく日本から活字も導入され年内には活版刷りの新聞になり，さらに 1904 年 2 月，日露戦争勃発で部数も一挙に 400 部となった。その後も 1906 年のサンフランシスコ大震

災をきっかけに日本人移住者や新来者が大幅に増えたため「羅府新報」も部数を伸ばしていった。

3 二世の時代，そして第二次世界大戦

日系人社会が，基本的には日本語しか分からない一世の時代から英語しか分からない二世の時代へと変化していくのと同時に日系新聞もその体裁が英語混じりになり，純粋に邦字新聞とはいえないものになっていった。1926 年 2 月から英文欄が発行されたが，その第 1 号は 2 月 21 日の日曜付録で，英文 3 ページ，和文 1 ページであった。当時の社説は「邦字新聞は二世の間に新しく読者を求めねばならなくなって来た，是れ必然の勢ひである…」と述べている。現在「羅府新報」は外見こそ全くの英字新聞になったが，裏面を見ると従来の邦字紙であり，両者は中央で合体する形を取っている。この形になったのは英語版が出版されたときにさかのぼるわけである。その後，人種差別，排日移民法の通過，1930 年代初期の経済恐慌，日米関係の悪化など，困難な社会・国際情勢の中で「羅府新報」はアメリカの主要な日本語新聞として第二次世界大戦開戦の翌年，太平洋沿岸日系人総立退きまで発行を続けた。1941 年 12 月 7 日，パールハーバー奇襲のニュースが届いたとき，「羅府新報」はすでにその日の日曜版を発行していた。翌日の 8 日は休刊，9 日は英文欄の 2 ページだけが刊行され，日本語版は 10 日から再開，簡単な戦争ニュース以外には政府当局の指示や命令に従って日系人の消息を伝えた。夜間禁足令，日系人の立ち入り禁止区域指定，立退き命令など，当時「羅府新報」が伝えた情報は日本語しか分からなかった一世にとっては非常に貴重なものであったと想像される。その後立退き命令は着々と実行され，「羅府新報」の社員も立ち退きを強いられたため，新聞自体もその後 4 月 4 日を最後に再刊の約束とともに発行を休止した。

4 戦後再刊から現在まで

立退いた後も，社屋の家賃を払い，輪転機は据えたまままで，活字の大部分を床下の物置に保管していた甲斐が

あって、「羅府新報」は他の日系新聞にさきがけて再刊することが出来た。ロサンゼルス市及び周辺に帰還した日系人の数は全く想定できず、資金も十分ではなかったので、再刊第1号の発行部数は1000部以下だったという。しかし再刊の反響は予想以上で、講読や広告の申し込みが殺到し発行部数はぐんぐん伸びた。収容所から帰還して生活再建に必死の日系人には、住居や仕事の情報が必要であり、日本のニュースにも飢えていたのである。再刊以来、日系社会の発展とともに購読者と広告利用者が増加、発行部数が500部前後増大し、現住所に移った1986年10月には25,000部に達していた。「羅府新報」がほぼ一世紀にわたって生き延びられたのは、このように偏に地域住人のニーズにあった報道を続けてきたことにあるといえよう。またそのニーズとは日系人収容補償問題をも含む幅広いものであったことも付け加えておく必要がある[4]。

5 現状そしてその未来

ロサンゼルスは北米では日系人の最大の拠点であるにもかかわらず、「羅府新報」の読者は減りつつあると言われている。何故なら、日系一世は殆どがもう生存していないし、英語版の読者である二世もかなり高齢化している。さらに白人などとの結婚により日系人そのものが消えつつあるのが現状であり、邦人新聞の将来は決して楽観視出来ない[5]（注3）。しかしロサンゼルスは日本との関係も深く、たとえ少数でもいわゆる新移民によって一定の読者数は確保できそうなものであるが、多メディア時代の現在、競争相手は複数で「羅府新報」の存在を脅かしている。筆頭はフリーペーパーで、現地の日本人の集まりそうな場所、例えば日系スーパーの入り口などには時に十数種類もの日本語の新聞や雑誌が山積みしてあるのが見つけられる。日刊ではないものの殆どがカラーオフセット印刷で、パソコン出版の向上を反映してか日本のタブロイド情報誌に引けをとらないほど立派なものである。現地在住の日本人のデイリーニーズはこ

の程度の情報紙で十分に満たされているといえる。なおかつ日本の最新情報に関して、複数の日刊紙の国際版が販売されているほか、最近ではNHKのテレビ放送が四六時中見られるようになってきており、特にニュースの殆どが同時中継である。さらに日本語OSを搭載した機種さえあれば、インターネット上の各種ホームページから日本のニュースを手に入れることができる。

「羅府新報」が生き残っていくためには、日系人に地元の視点から日本的なものを伝えていくことでユニークな紙面を作り、なおかつ日系だけでなくアジア系との連帯を図っていくことが必要になって来るのではなかろうか。創立からもう後2年で100年、2003年まで生き長らえて日系の一世紀を振り返って欲しいものである。

（注1）Kang & Lee's Asian Media Reference Guideのホームページによる。

（注2）羅府はロサンゼルスの異称。漢籍に詳しい一世記者の命名とされている。

（注3）前述のKang & Leeの情報によると現在の推定発行部数は2万2千となっている。

参考文献

- [1] アメリカを知る事典, 平凡社, 1986
- [2] Kang & Lee's Asian Media Reference Guide:
<http://www.asianmediaguide.com/intro/main.html>
- [3] ユウジ・イチオカ：一世 - 黎明期アメリカ移民の物語り -, 刀水書房, 1992
- [4] 羅府新報創刊90周年特集号, 羅府新報, 1993
- [5] The Japanese American National Museum:
Encyclopedia of Japanese American History, Facts on File, Inc., 2001